

講 評

41 回目を迎えた本展に、今年も多く多くの学校から素晴らしい作品が応募され、全作品を入選として展示しています。審査をする上で一番苦勞する事は、特賞 23 点を抽出しなければならないことです。競技会のように「勝ったのか、負けたのか」という判定は出来ないし、複数の審判員や写真判定を使って、皆が納得出来るような順位も、スポーツのようにはつけられないのです。つまり、芸術活動には最初から最後まで「勝ち、負け」というスタイルがないのです。人間個々の精神的な内面の活動状況を「色や形」で表したものが美術と言われるものです。このような内面的活動をどのように活発化させるかは美術教育の目標であり、明治時代から今日まで多様に変化してきました。中でも明治 43 年から昭和 6 年まで使用されたく物体を正確に描くことを目標にした『新定画帖』は、現在も日本人の心の奥底まで深く入り込み、写実的な表現に偏り「上手な絵、ほんもののような絵、きれいな絵」にこだわる鑑賞法が日常的に行われ、今日の美術教育の必要性を危うくしているように思います。

子供の内面活動を「色や形」で表現し、知識を教え込んだり、他人が介入しない教育を提唱した哲学者 H・リードの理論は、チャーチル首相に認められ、ヨーロッパからアメリカで実証されてきました。これを受けて、INSEA（国際美術教育学会）や、OECD（経済開発協力機構）の学者達が進めてきた美術教育への期待はとても大きく、中でも「創造力・独創性」の育成はどの教科よりも芸術教育に視点が置かれているようです。

41 回目を迎えた「児童生徒県南美術展」の審査は最初から世界的な視野で、子供達の内面を重視した審査を行って来ました。注目して欲しい作品を「特賞」の中から 3 点を例にあげますので、参考にしていただければ幸いです。



植田小 2 年 こまつあつき

植田小 2 年、こまつさんの「きらきらじまにようこそ」は、目に見える世界から離れ、誰も考えつかないような豊かな色彩、筆使いや描写力は独創性にあふれ、充実した成長が感じられます。



三梨小 6 年 佐々木優人

三梨小 6 年、佐々木さんの「秋の庭園」は描いている間に景色の中に没頭しています。男性らしい筆タッチ、概念にとらわれない形のとらえ方が個性的で、強力な運動感（ムーブマン）が表出しています。奥の方に小さな顔（自分かな）がのぞいていますね。



角館中 3 年 辻 雛

角館中 3 年辻さんの「向こう」は本格的な現代絵画として、評価できる素晴らしい作品です。細胞のように、うごめきあう構成は非凡であり、単なる筆に頼らないドロッピングや吹き付け技法などの工夫は見事です。

大学美術教育学会 名誉会員 佐々木 良三